雲仙プロジェクト通信　３号

平成２３年７月１５日（金）

本会会員、松本氏提案の「雲仙千の物語事業」の記念すべき第１回「瑞穂の巻」へ参加してきました。記念すべき第１回でしたが、報告は最終となり大変申し訳ありませんでした。

１.瑞穂周辺施設の体験

６月 １８日（土）、共助研の３名（波木、岑、山本）は福岡から出発し、竹添ハウス（雲仙市千々石町）へ１３時頃到着しました。天気はあいにくの雨模様でしたが、今回の参加者の自己紹介、事業の概要や今回のスケジュール等を確認した後、みなさんと一緒に雲仙市瑞穂町の施設体験に出かけました。

●共助研からの参加者　松本（TEAM GEAR・共助研）、波木・岑・山本（共助研）以上４名

【１日目】

最初に訪れたのは、雲仙茶の栽培・製造・販売をしている長田製茶さんです。有機栽培の茶畑や加工場をご案内いただき、お茶の試飲をさせていただきながら、お話を伺うことができました。ご対応いただいた三代目の長田篤史さんは日本茶インストラクターの資格を持ち、お湯の温度から、蒸らしの時間、注ぎ方にいたるまで丁寧に説明と実演をしていただきました。普段は何気なく飲んでいる日本茶ですが、奥の深さや味わいの深さを少しは理解できた気がしました。また、お店の中でテーブルを囲んでお話をしながらお茶を飲めるというアットホームな雰囲気が非常に心地よく感じられました。

長田製茶

有機栽培茶畑見学

加工場見学

お茶の試飲

そのまま、海沿いにある温泉施設、宿泊研修施設、体育施設等を兼ね備えた大規模な施設「みずほすこやかランド」内にある「みずほ温泉千年の湯」へ移動し、施設見学を兼ねて入浴をさせていただきました。温泉施設内も広く充実しており、１階の休憩室のほかに、２階の畳の広間にも数十人は雑魚寝できるほどの広い空間があり、簡易宿泊（休憩）施設として安く開放していただければ、立ち寄る方が多いのではないかと思いました。悪く例えるなら、街なかに良くあるスーパー銭湯の仮眠スペースですが、うまく使うことができれば地元の方やよそから訪れた方が、集い交流できるコミュニティスペースとなりうるのではないでしょうか。

みずほ温泉千年の湯

【２日目】

この日もあいにくの雨模様。しかも本降りです。今日最初の目的地は田代原キャンプ場でしたが、あまりにも激しく降る雨に、一行は満開の「やまぼうし」を横目に見ながら、次の目的地である「やまぼうし工房」へ向かいました。やまぼうし工房は、２０数年前に当地に移り住んでこられたご夫婦（お子さんもおられました）で陶器と染織を中心に営む工房です。と、ここまではどこにでもあるかなと思い

ましたが、なんとここは徹底して自然共生にこだわったエコハウスであり、スローライフを実践しています。建物はご主人自らが建てたそうで、建築過程の写真を見せてもらいながらお話を聞きました。そのほか太陽光発電をはじめ、バイオマストイレもあり、発生するメタンガスを屋外のバーナーに引き込んでいました。その仕組みは知ってはいますが、実際に火を付けていただくと少し感動してしまいました。ここまでは暮らしの話でしたが、もちろん作品も素晴らしいものです。ご主人の陶芸作品は手作りの家のギャラリーにゆったりと展示されており、商品の花卉にもさりげなく草花が飾られていました。奥様の染織作品も掛け軸やコースターなどがご主人の陶器と融合して心地よく展示されており、服やバック、小物などもあり女性が好みそうな空間です。もちろん雑貨屋好きの私にも気になる作品がたくさんありました。

やまぼうし工房

陶芸作品の数々

作品の花卉に飾られた草花

染織作品の数々

体験も終盤を迎えましたが、雨は一向に止む気配を見せません。次はみずほの森公園にある岩戸神社を散策（参拝）したのち、みずほ岩戸観光ガーデンで昼食です。みずほの森公園はキャンプ場や散策路、渓流を活かした施設などがあり、晴れた日であれば一日ゆっくり楽しめそうな施設でした。

岩戸神社

昼食のそうめん定食＋α

2. 夕食と夜なべ談義、旅のおさらい会

【夕食と夜なべ談義】

旅の目的の一つはやはり食です。特に竹添ハウスでは珍しいものや松本さんのアイデア（珍？）料理がみんなでわいわいと味わえるので毎回楽しみにしています。今回のメニューはココット鍋に地元のじゃがいもやたまねぎ、トマトなどを入れて石釜で焼いた料理、焼きチーズカレー、イタリアスローフード協会の食の世界遺産に認定されたエタリの塩辛パウダーをバーニャカウダ風にしたソースなどをつけていただく新鮮な野菜スティックでした。みなさん楽しく語り合いました。

夕食の様子

【旅のおさらい会】

旅の締めくくりとして、参加者全員で楽しかった今回の旅の感想やそれぞれの思いを語り合いました。今回のアドバイザーである新現役の会代表の古賀直樹氏からは、竹添ハウスのような都市住民と地域住民が集い刺激（発酵という表現をされていました）し合えるような場所の重要性についてお話がありましたが、今回の参加者はそのことを身をもって体験することができ、地域住民、都市住民ともに満足された表情になっているように感じられました。

（文責：山本）